
きのう見た夢

吉田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きのう見た夢

【著者名】

吉田

N5451P

【あらすじ】

組織からひたすら逃げる話。

(前書き)

そのまま見た夢を文章にしてみただけなので特にこれといった意味は含まれていません。
やらつと読んでいただけたら幸いです。

男の名前を知らない。

男の隣には幼馴染を名乗る女の子がひとり、迎えを待っていた。
車の多い駅前である。

女の子は言った。

「あなたの親が悪い人かどうかなんてわからないじゃない。」「
そうかな」

「あなたの親は立派な人よ。」

「うん、たしかに。けれどあの人は」

男はそこで何かを言おうとしてまた考えようとした。

「何度も考へても同じよ。あなたの親は今まであなたと付き合つてき
たなかで、何度もお会いしたことはあるけど、とても悪い人には見
えなかつた。」

「うん、たしかに。けれどあの人は」

男はそこで何かを言おうとしてまた考えようとした。

「何度も考へても同じよ。あなたの親は今まであなたと付き合つてき
たなかで、何度もお会いしたことはあるけど、とても悪い人には見
えなかつた。」

「あなたが悪い人かどうかなんてわからないじゃない。」「

「うん、たしかに。けれどあの人は」

男はそこで何かを言おうとしてまた考えようとした。

「うん、たしかに。けれどあの人は」

男はそれをぼんやりと眺めて、目を伏せた。

「僕は周りの人間が怖いのかもしれない」

車が目の前を通つた。通行人がぎゅうぎゅうになりながら人を押
しのけ歩いていく。

男は目をひらき、「ンンビーーくと歩いていく。

歩きながら考える。

古い洋館。そこにいる何人もの子供のこと。皆、一様に疲れきつ
た顔をならべ、壁に掛けられた絵からは絵の具が垂れている。とて

も温度が熱い。

「最近いるんだよ」

大人の声がしてハツと我に返る。一瞬、無意識に手に取っていた雑誌を落としそうになつた。大人の声に耳を傾ける。

「知つてるか？空想科学研究会つていう組織。今朝ニュースになつてた。」

「ああ、あれか。裏で何か危ないことをしているらしいな。」

「俺この間、見ちまつたんだよ」

そこで大人が声をひそめる。

「ニュースに出てたやつの顔だ。そいつの顔とおんなじ顔をした奴が、警察署の前をうろついてたのを。」

「本當か？」

「ああ。」

「だとしたら、警察も危ないな」

「どういう意味だ？」

「今朝のニュース。空想科学研究会の顔を公開した報道関係の奴らが失踪したって話だ」

「なんだと？どういうことだ」

「おそらくその警察署に今拘留されているんじゃないかな」

大人はそこでさらに声を小さくした。

「みんな知つてる話だが、誰一人としてニュースでその報道を見たことがない。警察の奴らが報道規制をかけたにちがいないよ」

「人は息をひそめた。それから周りの視線を感じながら、さつそつとコンビニから去つて行つた。

男は新聞を見る。今朝の新聞だ。表紙にでかでかと七人の顔写真。

今のはどうやら本

当のようだ。けれど、ここだけこの新聞が残つてゐるのは何故だ？

考えると同時に大きな音がした。驚いて振り返る。

飛び散るガラス。黒い車が突っ込んで、棚にぶつかつた。誰かが悲鳴をあげて、何人かの人がそれと同時に店の外へと走つて行つた。無事に立つて入れることのできた人間だけが、茫然と店内に立ち尽くした。

男は車に乗つている四人のうちの一人に目を向けた。それから、新聞の七枚の写真を順に確認してゆく。

ひとり、ふたり、さん、ん…ああ、こいつだ。

そう思つて、顔をあげもういちど確認しようとこいで目があつた。相手はこちらを見て怖い顔をして、こいつ言った。

「あいつだ！つかまえろ！」

何が何だか分からず、けれども一瞬のうちに全身の血の気が引いていくような気がしてバッと外に飛び出した。

駅はとても散らかつている。無規則に止められた車たちに逃げ道を邪魔された。先ほど目があつた男。髪を短く切りそろえて、きしんとした身なりをしていた。空想科学研究会のリーダーだろうか。逃げる足を速めながらふと考へる。

「追えッ！」

トーンの低い声が響く。それと同時に駅の周辺にいた何人かの人間が一斉にこちらへ向かつてきた。

ざつと20人ほどだらう。これでは逃げきれないかもしれない。すばやく動いて、紺色をした車のなかに身を隠す。遠くのほうでたくさん人の足音が聞こえる。

「奴を見つけたら俺を呼べ。奴は俺の手で捕まえる」

座席の下に身を縮める。手のひらを見ると、血が流れていた。ああ、

わざと逃げるときにガラスの破片で手を切ったんだと思い返した。

「」1週間、何もなくて。

とても平和な日々だったのに。また逆戻りか。
せっかく、組織を抜け出したのに、もつとひどいことになつたよ
うな気がする。

落ち着いて暮したい。

まつとうな生活をして、まつとうな会社に入つて、まつとうに結
婚して、まつとうに人生を終わりたい。

まつとうな人生つて何だらう。

記憶が現れたり、消えたりすることに何の意味があるのでらう。
自分の脳に問いかけた。

流れた血をにぎりしめる。

「ああ、」

絶望息で息を吐ぐ。「のまま、酸素を吸うことやめれば死ねるの
だらうか。けれど、それはおそらくこの体が許さないだらう。

「おい。やすんでもんじゃねえ」

嫌な声がした。

耳をふさぎたい衝動にかられながら顔をゆっくりと上げる。
奴だ。窓の向こうに立っていた。

「お前は何度逃げれば気が済むんだ」
眼で睨んだ。

「ふん。そんな疲れ切った目で睨まれても、痛くもかゆくもないん
だがね」
時間稼ぎがしたい。
「なにしにきた？」

「そんなの聞かなくてもわかんだ。お前のお父上の命令なんでね
「あいつの言つこと聞くなんて君ひじくもない」

「しかたがないだろ。俺は逆らつわけにもいかないからな」

「君はもつと聰明な奴だと思つてた。…今では君の声を聞くだけで

虫唾が走る。」

目を伏せる寸前、奴の顔が視界に入る。先ほどの余裕な表情と打つて変わって、恐ろしいほど無表情だった。

奴の表情を知っているような気がして頭のなかを探つてみた。けれど、それも無意味だ。また記憶が消えかかっている。ああこれは誰だつたか。何故こんな奴に追われているのだろう。

「おい、なんか言えよ」

声のほうを振り向いた。おそらく顔には恐怖の色が出ていたろう。「なんだ? そんな顔しても逃がしてやらんからな。お前は今、俺を怒らせたんだから」

奴がしゃべる。何を言つているのだろう。よく理解できなかつた。

「…おい、その顔をやめろ、なんでそんな顔をするんだ」

意識が遠のく。

「やめろつていつてんだ!」

奴が何かわめいた。

頭が真っ白になつてゆく。

ああ、あれは何だろ。奴の顔の向こうに、母の顔がみえた。とても怖い顔だ。呪われた表情だ。子供と手をつけないでいる。子供はこちらを見て言つた。

「ほひね、母上ほひねやんと來たでしょ。」

説き伏せるような口調は、嫌いだ。

全身の力が抜けて、意識が飛んだのがわかった。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。
乱文、失礼いたしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5451p/>

きのう見た夢

2010年12月17日06時48分発行